

〈中学生の部〉

・最優秀賞	18
・朝日新聞社賞	19
・紀伊國屋書店賞	21
・新潮社賞	22
・東京理科大学賞	24
・二松学舎大学賞	25
・くまもと賞	27
・佳作	28

〈高校生の部〉

・最優秀賞	42
・朝日新聞社賞	43
・紀伊國屋書店賞	45
・新潮社賞	46
・東京理科大学賞	48
・二松学舎大学賞	49
・くまもと賞	51
・佳作	52



心を自由に

学習院中等科 3年

ふかだ 深田
なぎ 奈義

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

いくら自分がえらくても世の中はとうてい意のごとくなる
ものではない、落日をめぐらすことも、鴨川を逆に流すこ
ともできない。ただできるものは自分の心だけだからね

全編皮肉が効いている。当時の高等遊民と呼ばれるインテリ知識人と拝金主義の実業家達を、猫の視点で語るのをいいことに、情け容赦なくコキ下ろしている。

しかも猫の主人は作者がモデルらしいので、自らをも容赦なくブツタ斬るその心意気は気持ちがいいくらいだ。ただしそこに適度なユーモアがあるから読後感はそれほど悪くない。その辺りが漱石のセンスのいいところなのだろう。

僕が印象に残ったのは第八話での、苦沙弥の旧友でヤギの

ような顎髭がトレードマークの哲学者、八木独仙が語る場面だ。

この回で珍野家の隣にある落雲館中学校の生徒が、何度も庭に野球のボールを打ち込み、苦沙弥はそのたび激怒する。その後訪れる主治医、甘木先生の催眠術も苦沙弥には効かない。何もかもが嫌になった苦沙弥に、最後に訪れた八木が語る言葉が以下の一行だ。これが印象深い。

『いくら自分がえらくても世の中はとうてい意のごとくなるものではない、落日をめぐらすことも、鴨川を逆に流すこともできない。ただできるものは自分の心だけだからね』

この哲学者は、苦沙弥の元に訪れる他の人間のように知識を振りかざすこともなく、しごく落ち着いた態度で「心の修行をつんで消極の極に達するべし」と説く。それを彼は「消極の修養」と呼ぶ。

この思想は積極的行動をよしとする西洋的思考とはおよそ対極だ。八木は「(積極的行動だけでは)どこまでも行っても不満足な人生しか生きられない」と揶揄する。「心の落ち着きは死ぬまで焦ったって片づくことがあるものか」と訴える。そうではなく「根本的に周囲の境遇は動かすべからざるものだということを前提に、その中で安心を求める手段を考えろ」と説く。「ただ一つ自分のものである心を自由にする修行をして安心を得ろ」と。

八木はとどめとばかり『電光影裏に春風を斬る』という、かつて無覚禪師という坊主が説いた文句を引用して苦沙弥（および語り部の猫）を完全にノックアウトする。

僕も読みながら、この思想は個人主義が蔓延している現代においても有効なのではないかと共感してしまったのだが、次の第九話で大きくしつぺ返しを喰らった。この回では苦沙弥の悪友である迷亭が、八木独仙がいかにも薄っぺらで器の小さな人間かを徹底的に暴露するのだ。これによって八木の思想をそっくりそのまま会話に引用していた苦沙弥も赤っ恥をかかされてしまう。そして僕も。

漱石よ、どこまで意地悪なんだ、あなたは。

だが、それでも「自分の心だけは意のままにできる」という、八木のしなやかで力強い言葉は、今のストレス満載の世の中に生きている僕にはとても素敵に響いてしまう。八木の思想が時代を何周も回って、かつてのように冷笑されることなく受けいれられることを僕は密かに期待したい。

審査講評

『吾輩は猫である』の中にあることば「心の修行をつんで消極の極に達するべし」を選んで、明治時代のはじめに西洋思想が急速に広がる中で、夏目漱石の東洋哲学に気づいたことが素晴らしい感性である。

朝日新聞社賞

本当に大切なもの

東京都立白鷗高等学校附属中学校 2年

矢部 晴大 やべ はるた

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です」

坊っちゃんは知恵が足りないようだが、本質を見る能力には長けている。私は、「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です」という一文に現代人が見落としているものを感じた。

友人を不当に僻地に飛ばしたことに怒り、辞める、と詰め寄る坊っちゃんに対し、校長である狸は、今辞めるなら君の履歴に関わるだろうと脅す。しかし坊っちゃんは、自分の身の上より、友情を選ぶ。

インターネットが普及し、誰もが自分のことを発信できるようになった現在では、昔より自分と他人の差が可視化されているように感じる。自分と他人の差と言っても、あくまで

年収や顔の醜美、学歴など、そういう表向きの事だ。いくら表向きが立派でも、その人自身の価値は判断できない。ところが、そういう表向きが立派な人と、自分とを比べて精神を病む若者が後を絶たないのだ。

私たちの世代はよく「ゼット世代」と呼ばれる。ゼット世代というと、多くの人は、怠けものだとか、繊細、というイメージを持っているだろう。私自身、上の世代と比べて、ゼット世代は少し異質のように感じる。

私はその原因は、インターネットによる可視化から起こる、社会への不満や、将来の不安だろうと考えている。今の若者は幼いころから身近にインターネットがあった。そのため、常に誰かと自分を比べて、自分の能力を的確に認識せざるを得なかったのだ。これは大変残酷なことである。夢や希望というのは、自分の能力を誤認しなければ全く持てないのだ。ゼット世代は夢や希望が持てない故に、向上心もない。だから、自堕落な生活を送ることになっている。その様子を見て、上の世代は、怠けもの、繊細と言う。

ゼット世代は、自分の能力について残酷なほどの確に認識している。しかし、自分の価値を認識する能力は低いと思う。表向きの情報に重きを置きすぎているのである。表向きがすべてではない。人間の価値は、目には見えないもので決まるのだ。それなのに、義理や心の醜美などの目に見えない大切

なものを見落としている。だから、実際より自分の価値を低く見てしまっている。

小説「坊っちゃん」では、全体を通して、目に見えないものの大切さを説いていると思う。悪役の赤シャツは学士や教頭などという肩書が立派である。それに対して、坊っちゃんはどういったものが何もない。しかし、坊っちゃんには義理人情があるし、何より心が綺麗である。肩書ばかり立派で、中身がない赤シャツを、肩書がなくても心が立派な坊っちゃんが懲らしめる話なのだ。

「坊っちゃん」は、百年以上愛され続けてきたが、今日になってより一層深みが増してきている。現代人が見落としがちな本当に大切なものを、坊っちゃんは百年前より私たちに教えてくれているのである。

審査講評

「人間の価値は、目に見えないもので決まる」という教訓を引き出しており、漱石を読む意義をわたしたちに教えてくれる秀作。

紀伊國屋書店賞

義務と好意

学習院中等科 3年

やがわ 矢川 隼伍

作品名『思ひ出す事など』
選んだ一行

彼らの義務の中に、半分の好意を溶き込んで、それを病人の眼から透かしてみたら、彼等の所作がどれ程尊くなるかわからない

「彼らの義務の中に、半分の好意を溶き込んで、それを病人の眼から透かしてみたら、彼等の所作がどれ程尊くなるかわからない」

今回読んだ「思ひ出す事など」という作品は、漱石が胃潰瘍からの大量出血で命の危険から何とか生還した回想記だ。命の危険があった状況だったこともあり、この作品の中では、人間としての本当の漱石の気持ちが見え表されている。僕が最も印象に残り選んだ一行も、その中の一つである。その文章は、病人の漱石が仕事としての治療だけでなく、優しく気

遣ってもらふ好意も受け、それはとても尊い物だという内容だ。これを読んだ時、なんとなく感じていた、普段の生活している環境が、仕事をしている人の義務と好意で成り立っていることが言語化されて理解できた。

この文章にある「好意」は、ぼくがこの社会で生活していて、結構受けている物なのだと思う。生活するといろいろな仕事をしている人と接するし、お世話になる。バスの運転手さんや駅員さん、お店の店員さん、そして毎日の学校の先生や職員の方。仕事なので給料や代金を受けるので、それに対する義務があり、それはやらなければならないことだけれど、僕らは本来の仕事の義務以外の親切や助けを普段からたくさん受けているのではないか。僕が特に思い出すのは、昔祖父の家に一人で行く時に、地下鉄の駅で出口が分からなくなっしまい駅員さんに尋ねたところ、地図で教えてくれるだけでなく実際に僕を出口まで連れて行ってくれたことがあった。この場合、教えてくれるまでは仕事の義務かもしれないが、一緒に出口まで付いてきてくれたのは好意だったと思う。そのおかげで不安だった気持ちから安心な気持ちに変わった。これは文章にしたなら簡単なことに感じるかもしれないが、当時の僕の気持ちとしては、まさに、その駅員さんの所作がどれ程尊かったかわからなかった。このような好意を受けてるかどうかは、普段は気づきにくい場合も多いのかもしれない

いが、弱っていたり困っていたりしている時に気づいたり、ありがたさが分かってくるのだと思う。病気で床に伏していたり、もうだめかもしれない気が弱くなると、誰でもいろいろなことを考えてしまうと思う。病でおそらく気が弱くなった漱石は、そのありがたさを感じたのだと思った。

もし好意がなく義務だけが当たり前の世の中だと、漱石が別のところで書いてるように、この社会はもつと器械的だったと思う。お金を得るために義務に忠実ということは、仕事として最低限必要なことは間違いないと思う。そこに好意が入ることが、社会でみんなが気持ち良く助け合って生きていくには、あつたほうが良いものだと思った。

審査講評

自身の体験もふまえつつ漱石の言葉を現代の生活に沿った文脈で捉え直そうという態度に好感がもてる。

新潮社賞

私の松山、漱石の松山

松山市立勝山中学校 3年

邑松 むらまつ 藍子 あいこ

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

きのう着いた。つまらん所だ。

私の住む街、松山はしばしば『坊っちゃん』ゆかりの地』として紹介されている。しかし、この作品の中では、田舎で見どころもないような街として書かれ、良い印象は見受けられない。かくいう私も、坊っちゃんと同じく東京から松山に渡ってきた身である。初めて松山を訪れたのは、小学校入学より前で記憶が定かではないが、東京に比べ寂れた街、という印象を受けた。また、今でこそ愛着があるものの当時いきなり見慣れない街に放り込まれた私の心の中は、不安や心配、恐れでいっぱいだった。それは坊っちゃんにも同じことが言えたかもしれない。ただ、坊っちゃんは意地っ張りで気が強い江戸っ子である。坊っちゃんも同じような感情を抱きつつ

も、弱みを見せまいと喧嘩腰な態度をとったのではないか。もちろん、日本の中心地で当時、世界的な大都市だった東京で生まれ育った坊っちゃんからすれば、小さな島の小さな町である松山は面白味のない所に見えるはずだ。しかし多少は、前述した坊っちゃんなりの強がりの面もあるのではないかと私は思う。

私が選んだ「きのう着いた。つまらん所だ。」という文は、古くから坊っちゃんが慕っている清へ宛てた手紙の一部である。清に心配をかけまいと、自分は松山で逞しく生きていることを伝えるため、気張った言葉でこの街を表していたのかもしれない。そう思うと、この一行は不器用だが温かい坊っちゃんの性格を、松山という街と坊っちゃんのべらんめえ氣質を巧みに利用し、上手く表現していると感じる。加え、坊っちゃんの気取らない、スパッと切れ味の良い口調から爽快感が生み出されている。たった十数文字の短く簡潔な文だ。しかし、この十数文字から坊っちゃんの様々な面を感じることが出来るため、私はこの一行に強く惹きつけられた。

漱石自身も、坊っちゃんと同じく教師として松山に渡った経験がある。漱石が松山に滞在したのは僅か一年だが、自身の作品の舞台として取り上げているぐらいなのだから、きつと良くも悪くもたくさんを経験したのだろう。この作品での坊っちゃんの心理描写は、漱石が実際に感じたことを

坊っちゃんと重ね合わせていたのではないだろうか。その場合、あけすけに物を言う坊っちゃんのキャラクター性は、感情や体験を表すことにおいてかなり適しているようにも感じ取られる。

あくまでこの物語のテーマは、坊っちゃんのような正直者が損をする世界の不条理さであり、私が選んだこの「一行」は挿話のようなものかもしれない。しかし、私自身が坊っちゃんに似たような経験をしており、物語の舞台となった松山に住んでいたからこそ、この「一行」に目を向けることができたと思う。坊っちゃんを通した漱石自身の生きた感性をより鮮明に感じとれたのは、他でもない私自身の経験があつてこそだろう。私の松山と漱石の松山、形を変えつつも時を超え、どこかで繋がっているのかもしれない。

審査講評

「つまらん所だ」と言い放った主人公の「強がり」や「不安」といった真情を的確に分析している。清への手紙の一節であるこの言葉が清への思いやりであると指摘しているのもよい。

東京理科大学賞

正しい人の道

白百合学園中学校

1年

平田 ひらた
希 のぞみ

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

あした勝てなければ、あさって勝つ。

「あした勝てなければ、あさって勝つ。」

この言葉が強く印象に残りました。これこそ坊っちゃんの正義感が強く、嘘を嫌う潔癖な性格が現れている、と思ったからです。

坊っちゃんは中学校の数学教師として赴任したのですが、生徒たちにいたずらをしかけられました。しかし生徒はいたずらを認めようとしないので、嘘をついている様子に腹を立てた彼は、生徒に対して真正面からぶつかっていきます。

上から目線で常識を押しつけるのではなく人間対人間として、物事の善悪を問うのです。また、坊っちゃんの言っている「勝つ」という言葉にはいたずらしたことを謝らせるより

も、嘘をついたことを反省させる、生徒の正直な心を引き出すための信念が込められているように思い、深く感動しました。

私は嘘をつくことが嫌いで苦手です。思ったことをすぐに言動にうつしてしまいます。そこは、坊っちゃんと似ているのかなと思いました。ただ私は坊っちゃんのような自分の中のゆるがない正義というものがまだよくわかっていません。「人の道にかなって正しく正しいこと」の人の道を模索している最中です。自分では良かれと思った発言が人を傷つけたり、個人の意見と集団の意見が違った時にどちらへ舵を切るか悩んだり、両親のアドバイスと友人のアドバイスの違いに戸惑うことも。私の中の正義はいつも不安定で、周囲に左右され続けています。

でも、今回「坊っちゃん」を読んで、勝つということは、その自分の弱い気持ちに喝を入れることなのではないかと思いました。他人のせい、状況のせい、環境のせいにせず、確固とした自己を持ち、誰にも嘘をつかずに生きることの清々しさを教えてもらったような気がします。坊っちゃんのように、いつも自分を律することはまだ私には難しいかもしれないけれど、自分の信じた正義を貫く勇気を心のどこかに持ち続けたいと思っています。

道幅が分からない、人の道の中で今の私が大切に思うこと

を考えてみました。それは、自分の正義と同様に相手の正義も尊重することです。自分の気持ちに嘘をつかない生き方という、かつこよく聞こえますが、私自身を振り返ると、他者のことを考えずに楽をしているだけとも言えるのではないかと、また、一人よがりの正義が争いを生む、ということもあるように思います。

私には私を大切に思ってくれる家族がいて、友人がいて、恩師がいます。私の生きる世界はこれから少しずつ大きくなっていくと思います。皆の中にある正義は目に見えないし、対立することもあるかもしれないけれど、歩み寄り、関わることを諦めないで生きていきたいと思っています。これが私が解けた「あした勝てなければ、あさって勝つ。」です。

審査講評

「皆の中にある正義は見えないし、対立することもあるかもしれないけれど、歩み寄り、関わることを諦めないで生きていきたい」と素直に夏目漱石の作品を受け止めている。

二松学舎大学賞

人生の最期に

白百合学園中学校 1年

金井 かない 綺花 あやか

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれ限り御免蒙るよ。」

「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれ限り御免蒙るよ。」

猫がその生涯を閉じようとする時に辿り着いた境地、それこそがこの作品を通して描かれてきた人間たちの営み、思い、苦しみ、悩み、それら全てに通じる答えであり、救いであるように感じました。

猫を通して客観的に、時には寓話的に紡がれていた人間の愚かしいが愛すべき行動、その根底にある考えや思惑、そんなものは賢くなつたと思ひ込んでいる人間たちが勝手に作り出し、こねくり回している見戯のようなものではないか？

そうだとすると、生きている意味は？悩んでいる意味は？
 このようなことは終わりを迎えるその時に考えられることでも答えがでるものでもなく、最後は成り行きに任せるしかない、だからこそ生きているこの時間に寸暇を惜しんで考える必要がある、そのような作者の思いが聞こえた気がしました。

それと同時に、もがいてがりがりしたとしても、どうしようもないことがある。そんな時にはあきらめるしかない、自分の力ではどうにも出来ないことも確かにある、と読者に訴えかけている、そのような一文でもあります。猫が最後に「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えますが、神頼みするしかないこともある、それも人生だよ、と作者がニヤリと笑って言っているようにも思えました。

この一文からさかのぼってみれば、散々に酔っぱらいを馬鹿にしていた猫が、死というものを認識し、抵抗が許されないその不条理に耐え切れず、飲み残しのビールを舐めてしまったのも、自分の力ではどうしようもない何かを感じた故でありました。

人生（猫生）は始まったときから終わりに向かい続けていること、つまりは誰しもが死ぬために生きているということ、それを認識してしまい空虚を感じた猫、虚無へ戻っても良い心持ちになっていたものの、実際に水の中に落ちれば、死に

抗うように足をのばしたり、飛び上がってみたり、必死に生を掴もうとしました。必死の苦しさの中、この苦しさはそれから逃れようとすることで生じていることを悟り、苦しみから逃れるために苦しむ、その矛盾が猫を穏やかな最後に導きました。

猫は生きる矛盾を受入れ、それに逆らわず念仏を唱えられましたが、人間はどうだろう？私はどう思うだろう？猫の「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。」の境地にはまだまだ辿り着けなさそうですが、必死にがりがりし続けていきたいです。

審査講評

猫の人間世界に対する俯瞰、猫の死に対する達観を充分咀嚼して書き切る理解力・表現力に驚いた。恐るべき相対主義的思考だと思った。

くまもと賞

狂気

暁星中学校 3年

銭谷 翔ぜにたに しょう

作品名『人生』

選んだ一行

二点を求め得て之を通過する直線の方角を知るとは幾何学上の事、吾人の行為は二点を知り三点を知り、重ねて百点に至るとも、人生の方角を定むるに足らず

僕は夏目漱石の作品「人生」の中の一文「二点を求め得て之を通過する直線の方角を知るとは幾何学上の事、吾人の行為は二点を知り三点を知り、重ねて百点に至るとも、人生の方角を定むるに足らず」が今でも心に残っている。

人は生まれて死ぬ。人生とはその間に起きた物事の集合である。しかし、世界には数十億人いて、それぞれその人の特徴があつて、その人の心の状態で物事の見方が変わっていく。だから一概に人生といっても、人の人生を勝手に決めつけることはできないのだ。夏目漱石は小説がこの複雑な人生の一

側面を描き、我々に一つの哲学的な教訓を与えてくれるものだと考えている。確かに小説には心理的な分析がなされているものや、直感的に理解できる物事が多く、人生の大部分はこれらが占めているだろう。けれども、人生には何らかの理由で自分の理性では制御できず自分が自分ではないような状態に陥ることがある。夏目漱石は作中でこれを「狂気」と呼んでいる。「人間の行為は良心の制裁を受け、意思の主宰に従ふ」と書いてあるように、通常、人は善悪に判断がつき、その人の意思で行動する。しかし何か異常なことが起こったりすると人は意図しない行動をしてしまう。それは誰にでも起こりうることで、どれだけ冷静沈着な人であっても気を取り乱すこともある。つまり、どれだけ自分の心理状況を理解しようとも自分の人生を操れるわけではないことだ。それが夏目漱石の言いたかったことだと僕は思う。また、夏目漱石はこの「狂気」を犯罪と関連づけている。人は何かを犯せば罰が下ることを認識しているがため何も罪を犯さないが、ひとたびそのような状態になってしまえば己の感情に任せてしまふ。他にも天災と関連付けていて、これが人間の意思ではどうすることもできない神の意思というものではないかと書かれている。

夏目漱石は「狂気」について「陰呑なる哉」と綴っているが、本当に「剣呑」なことなのだろうか。

しかし、僕はこれは人生の無限の可能性を表しているように思う。僕の心の中に残っている「二点を求め得て之を通過する直線の方向を知るとは幾何学上の事、吾人の行為は二点を知り三点を知り、重ねて百点に至るとも、人生の方向を定むるに足らず」という文には人生は幾何学とは違い、どれだけ色々な物事が起きても結末がどうなるかは誰にもわからないという意味が含まれていると僕は解釈してる。人生は不確定で危険であると同時に、自分の行動、気持ち次第ではない方向に進む可能性があるということを考えさせられる僕の好きな一文だ。

審査講評

中学生が「人生」を読んで、「人間の行為は良心の制裁を受け、意思の主宰に従う」という言葉を受け止めて、「どれだけ自分の心理状態を理解しようとも自分の人生を操れるわけではないこと」に気づいたことが素晴らしい感性である。

佳作

今にも生きる義理と人情

学習院女子中等科 2年

かわむら
川村 響子
きようこ

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です

この一行は主人公の無鉄砲さと義理堅さの両方をよく表していて印象的だった。今後も教師を続けるのであれば、たとえ不満があっても経歴に傷をつけないようにがまんするのが普通だろう。ところが主人公は退職に追い込まれた味方の山嵐への義理と人情を優先して、松山で教師になって一か月しか経っていないのに自らも辞表を出して退職してしまった。主人公は冒頭にある通り無鉄砲のおかげで損ばかりしているようだが、山嵐と一緒に松山を離れる際に「船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。」とあり、主人公本人はそういう生き方に後悔はなさそうだ。

また、主人公は東京に戻ってから、愛情をかけて育ててく

れた下女の清を引き取って一緒に暮らしお墓まで世話してあげたところも義理堅い。主人公は就職して初めて世間に出てひきょうな目にあい、清の真っ直ぐな愛情や親切のありがたさに改めて気づいた。兄ばかりひいきする実の両親に可愛がられなかった主人公がひねくれずに真っ直ぐな気性に育ったのは、清が愛情深く育ててくれたおかげだと思う。

日本人が義理と人情を大切にするところは昔から変わっていないようだ。主人公がただ単に無鉄砲で喧嘩早いだけの人物なら、この作品はここまで長く愛されてはいないだろう。また、最後は主人公をおとしいれようとした赤シャツと野だに一矢報いるところもスカッとさせられる物語である。

主人公はお堅い教師のイメージとは違ってとても素直で人間らしい愛すべきキャラクターである。清が主人公を坊っちゃんと呼んで育てたが、主人公は自分のことを坊っちゃんらしいとは全く思っていない様子である。ところが、主人公をおとしいれた赤シャツと野だが主人公を「べらんめえの坊っちゃん」と呼んでいることを後で知る。主人公は同僚の教師たち一人一人に勝手にあだ名をつけて人間観察を楽しんでいたが、実は自分にもあだ名がつけられていて、それが清に呼ばれていた「坊っちゃん」と同じで、作品の題名にもなっているところが面白い。東京生まれ東京育ちで世間知らずの真っ直ぐな気性がにじみ出ていて、先輩の教師たちから見

も坊っちゃんらしいということとでつけられたあだ名なのだろう。

この作品には長く愛される要素が色々詰まっている。目先の損得ばかり考えて他人をおとしいれて自分さえ良ければいいという考え方では、いつかしっぺ返しがかかるかもしれない。主人公のように大切に思う人に対して真っ直ぐに誠実であれば自分として後ろめたいこともなく幸せに暮らせるだろう。人との長い信頼関係を築くには義理と人情を守ることが大切なのだと思う。私も家族や周囲の人との信頼関係を大切に生きていきたい。

佳作

漱石の描く石地蔵

暁星中学校 3年

河井 一桜 かわい いっさ

作品名 『夢十夜』
選んだ一行

おれは人殺であつたんだと初めて気がついた途端に、背
中の子が急に石地蔵のように重くなった。

僕が選んだ漱石の一行は、「おれは人殺であつたんだと初めて気がついた途端に、背中の子が急に石地蔵のように重くなった」です。

この一文は夢十夜の第三夜のラストの一行です。この作文を書くにあたり調べてみてわかったのですが、漱石は若いころから神経衰弱を患っており、心のリハビリのために書き始めたのが小説だそうです。漱石の中にある不安や恐怖などが、夢という形で表現されているこの夢十夜が印象に残りました。その中でも特にホラーテイストなのが、この第三夜です。子どもを背負いながら田圃を歩いていた自分は、盲目であ

るその我子から衝撃の事実を告げられます。その事実とは自分が百年前のこんな闇の晩に一人の盲目を殺した事。その事実が気がついた途端、背中の子が石地蔵のように重くなる。そのあと、冒頭の一行で締めくくられています。

僕思う第三夜の見どころは奇妙な子供に翻弄される「自分」の焦燥感だと思います。親である「自分」の問いかけに子供は、なに昔からさと答えます。まだ六歳しか生きてない子供が昔からなどと返答するのにも違和感を覚えます。このようにこの第三夜では子供の異常さが描かれています。そしてまだまだ子供の無気味さは続きます。子供は盲目のはずなのに予知めたことまでし始めます。「自分」も少し怖くなりもうこんな子供はどこかへ捨ててしまおうと、焦り始めます。

そして「自分」は森の中に迷い込み、一本の杉の木の前でついに思い出します。「自分」はこれまで子供が何かを言ってもただ無気味そうにするだけでしたが、ラストのこの場面では子供の「御父さん、その杉の根の処だったね」に対し「うん、そうだ」と思わず口にしてしまいます。そして自分の罪に気がついた時、子供が石地蔵のように重くなります。いったいどうして、子供は重くなったのでしょうか。僕が考えるに、「自分」が人殺であることを自覚したことで罪の意識が重たくのしかかってきたからだと思います。

また、実は物語の中盤で子供自身が重たくなることを予言しています。子供が「御父さん、重いかい」と聞いたので、「重かかない」と答えると「今に重くなるよ」と答えました。第三夜の真相をすべて知ったうえでこの、「今に重くなるよ」を読むとまるで「今にお前は罪の重さを思い出すよ」と言っているようにも感じられます。背中の子供という要素を使つて、「自分」に罪の重さを体感させるという秀逸な技法に漱石らしさを感じました。本文には書かれなかった「自分」のその後を想像すると、後味の悪さを覚えますが、其れも含めて、この第三夜の魅力だなと思います。

佳作

『坊っちゃん』を読んで

暁星中学校 2年

篠原 将人
しのはら まさと

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。

僕は夏目漱石の『坊っちゃん』を読みました。この本には、坊っちゃんのセリフの中に、多くの心に残る文章がありました。その中でも、僕が一番心に残った一文は、「船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。」でした。

坊っちゃんは小さい頃からよく喧嘩をして周りにいる大人はあきれていましたが、喧嘩をする理由は、曲がったことが嫌いで損をすると分かっているにもかかわらず、学校で先生になっても、曲がったことが嫌いでまっすぐに物を見て、正しいことを貫いていました。

非常に印象的だったのは、生徒たちに対しても同僚や上司

の先生に対しても、人から言われた噂話ではなく、坊っちゃん自身が自分の目で見たことを信じるという部分です。最初にその人の印象を植え付けられてしまうと、人はどうしてもそういった枠で人を見て判断してしまいがちですが、坊っちゃんはその枠をしません。自分がその人とどう話し、どう感じたかを大切にしています。僕は、これまでも多くの人と知り合い、そしてこれからも多くの人と出会いますが、坊っちゃんのように、自分の目で見て感じたことを大切にしていきたいと思いました。

そんな坊っちゃんが、赤シャツの陰謀で陥れられてしまい、同僚であり友人の山嵐が責任を取り教師を辞めることになってしまいます。その時までは、先々を考え様子を見てきた坊っちゃんでしたが、ついに抑えきれず、山嵐と一緒に赤シャツと直接対決することを決めます。僕は、自分のことより友人を大切に思い行動する坊っちゃんがかっこいいと思いました。そして赤シャツをやつつけた後に、坊っちゃんも辞表を出し、学校から去ります。

僕が一番印象に残った一文はその時のものですが、状況としては、赤シャツをやつつけたものの、学校を辞めることになったのは山嵐と坊っちゃん、赤シャツから謝罪があったわけでもない、結局坊っちゃんは負けたともいえます。そのような状況の中でも、坊っちゃんは、後悔をせず、自分

の意志を貫き通し、権力やお金を持っているものが勝つという世の中の流れからあらがおうとした勇敢な姿に僕は心を打たれました。

人は常に誰かと接し、状況はめまぐるしく変わっていく中で、自分の気持ちに常に正直でいながら、それを維持し貫くということは非常に難しいと僕は思います。「坊っちゃん」を読んで、そんな風に生きることができる坊っちゃんのかっこよくもあり、うらやましいとも感じます。これからは少し、坊っちゃんを意識して、自分の意志や思いを大切にしていきたいと思います。

佳作

それぞれの新しい世界

白百合学園中学校 1年

古賀^{こが} あさ美^み

作品名『三四郎』

選んだ一行

その時ポンチ画の男は、死んだ小泉八雲先生は教員控室へ這入るのが嫌で講義が済むといつてもこの周囲をぐるぐる廻ってあるいたんだと、あたかも小泉先生に教わった様な事を云った。

私は、現在までずっと新宿区で成長してきた。幼い頃から夏目漱石生誕の地の碑や、夏目坂。それから小泉八雲旧居跡などが近所にあり、何の気なく眺めていた。そしてちょうど熊本にも縁があり、熊本に訪れた際に、漱石旧居や八雲旧居があることを知り、興味を持って観に行った。それをきっかけに漱石と八雲にも運命的な縁があることを知った。

元々有名な話であったのだが、十七歳もの年齢差のある二人。熊本の第五高等学校の講師として、八雲の後任を漱石が

任される。漱石は英国留学を経て、また八雲の後任として東京帝国大学の講師となる。同じ立場で教えていたのだから旧居が近くにあるのも、それは当然であった。だがしかし、二度も赴任先を同じくして、しかも前任、後任が二回重なるというのはやはり運命的なものを感じる。

漱石は八雲の後任となることに恐縮していたようだ。そのオマージュなのか「三四郎」にも「その時ポンチ画の男は、死んだ小泉八雲先生は教員控室へ這入るのが嫌で講義が済むといつてもこの周囲をぐるぐる廻ってあるいたんだと、あたかも小泉先生に教わった様な事を云った。」というくだりがある。これは三四郎が大学で出会い、友人となった与次郎の言葉であるが、この風変わりな与次郎を含めて三四郎は広田、野々宮、原口など自分の信じる学問を突き詰めて生きる人達と出会う。

周りの人物をみな虜にする魅力的な美禰子に三四郎は恋心を抱くが、結局その想いは実らない。時々届く母の手紙から、母親は三四郎が三輪田の御光さんと結婚することを望んでいることがわかる。

三四郎はこれらの人物と触れ合う中で「三つの世界」が出来たという。学問の追求に関しては憧れもあったかと思うが、母や御光さんのような純朴な女性ばかりでなく、知的で社交的な女性達が存在すること。三四郎が都会に馴染むにつれて

感じたカルチャーショックを冷静に判断しているのが面白い。文体は難しいが、少し大人のアオハルを読んでいるようで、映画を観ているように読んでしまった。

作中の「九段の燈明台」や「九段の上の銅像」など、これらは現在も健在で、私も通学路で毎日見かけるものであるが、三四郎、ひいては漱石もよく見かけていたものであろうと思うと更に親近感をもった。

漱石と八雲はこれまた揃って「雑司ヶ谷」で眠っている。正直、今までハードルが高くて近代日本の名作を避けてきた私であったが、今回初めて「三四郎」を手にとり、幼い頃から少しずつ、「読んでごらん。面白いよ。」と文豪二人に手招きされてきたような気さえしている。三四郎も新しい世界が出来た訳だが、私もまた新しい世界に引き込まれたようだ。

佳作

三四郎の成長

千代田区立九段中等教育学校 3年

鈴木 凜子

作品名『三四郎』

選んだ一行

女はこの夕日に向いて立っていた。三四郎のしゃがんでいる低い陰から見ると岡の上は大変明るい。

この本を読み、私の心に残ったのは「女はこの夕日に向いて立っていた。三四郎のしゃがんでいる低い陰から見ると岡の上は大変明るい。」という部分である。これは三四郎が初めて美禰子と出会う場面だ。私がなぜこの文を選んだかという、美禰子と三四郎との対比とだんだんと東京に馴染んでいく三四郎の成長を読み返したときに感じられた文章であったからだ。

夕日を浴びて明るく光る女、美禰子と陰でしゃがんでいて暗くなっている三四郎の対比が印象的な部分である。これは物語の初めの方であり、三四郎は九州から上京してきたばかり

りである。これを踏まえるとこの対比というのは東京で過ごしてきて、文化や雰囲気などといったものに染まっている美禰子と東京になれておらず、染まることができていない三四郎ということである。

また、三四郎はこの後、様々な人と出会い、様々な経験を通して東京について学んでいくことでだんだんと馴染んでいくのである。そのため、この文章は東京に馴染んでいった後の三四郎と馴染む前の三四郎を比較できる文章でもある。

東京で暮らしていきながら成長していくというのが本の中のストーリーであるが、これは私たちが生活する中でもあるのではないか。人はいつもと同じようなことをしているだけでは新しいことを知ることができないと思う。新しい環境や人間関係の中で様々なことに挑戦して成長できるのである。この物語で三四郎が新しいことを知ることができたのは九州から東京に行くという挑戦をして、様々な人と出会い、考え方や生き方をたくさん学んだからである。

このようなことを考えていると私が引越をしたときのことを思い出した。引越をしたばかりのときは新しい環境や人間関係に戸惑い、上手くやっていけるか不安だった。しかし、過ごしていくうちにだんだんと慣れていくことができた。引越をしなければ出会えなかった人と出会えたり、地域による違いを知ることができたりと新しい経験をするこ

とができて良かったと思う。

三四郎も上京したばかりは環境や文化の違いに戸惑っていた。それは私が選んだ文章の場面でもある。しかし、三四郎は新しいことを学ぶために挑戦したのだ。私はこの物語を読んで、これから先も様々なことを経験する場面が多くあると思うが新しいことを恐れずに知りたい、学びたいといった心を持っていきたいと思った。そして、三四郎のように何かの経験を通して成長していきたい。

佳作

移ろう常識

千代田区立九段中等教育学校

3年

渡辺 わたなべ

葵 あおい

作品名『三四郎』

選んだ一行

「私そんなに生意氣に見えますか」

「私そんなに生意氣に見えますか」

これは上京してきた青年、三四郎との会話で、美禰子という女性が突然発した言葉だ。

主人公は三四郎だが、私は時折、美禰子が真の主人公であるかのように錯覚することがあった。美禰子は常に、三四郎を翻弄するミステリアスな女性として描かれている。三四郎の目には解せない行動としか映らなかった彼女の行動の裏には、彼女なりの深い葛藤と現状への救いを求める思いが隠されていたのではないだろうか。

美禰子は慣習通り、家族に勧められた相手と結婚することに疑問を抱きながら、青年野々宮、三四郎との関わりを持ち

続ける。ただ、どちらに対してもはっきりと好意を見せる場面はない。その一連の行動からは、自分の意志で未来を考える新しい価値観を持った女性であることが伺える。彼女は明治時代の社会の風潮にとらわれずに、自分の道を行こうと、生き方を模索していたのだ。

『三四郎』には、明治時代の自由恋愛や個人主義が高まる世相が反映されている。これは新しい西洋の価値観であり、伝統的な日本の価値観とは対立するものだ。当時の日本では、親や家族が決めた相手と結婚するのが一般的であり、個人の意思はあまり尊重されていなかった。しかし、そんな時代にも自由恋愛を求める動きが広がり始めていたのだ。

現代と明治時代の違いは明らかだが、共通点も存在する。明治時代は自由恋愛への反発があり、現代は同性愛などの多様な恋愛の形に対する偏見がある。

ここで、時代と共に移り変わる「常識」について考えたい。現代から見ると明治時代の常識には多くの疑問が浮かぶが、未来から見た現代も同じように思われるかもしれない。今議論されていることが、やがて常識となり、その議論があったこと自体を疑問に思われるような未来が訪れるかもしれない。

こうした視点から見ると、美禰子の曖昧で煮え切らない行動も、社会の常識に彼女なりに立ち向かっていた姿であるよ

うに映る。ただ、彼女自身も自らの本当の想いが分からない、「迷える子」であつたのだろう。迷いながらも進む姿には無邪気さすらあり、とても愛おしい。とはいえ、実際のところ、美禰子がどのように考えていたのかは誰にもわからない。それでも、もし、三四郎が美禰子の想いに気付けていたら。もつと自由な時代だったら。こう考えずにはいられない。だが、三四郎はそれを理解できるほど大人ではなかつたのだ。

これは確かに、切ないすれ違いの物語である。けれども、どこか清々しさまで覚える。それは、彼の純粋な感情に惹かれ、その成長に期待、喜びを感じるからであろう。

いくら困難に思えることでもいつかは理解を得られる。そんな希望を感じさせてくれる『三四郎』。これは、時代を超えて少数派へのメッセージを伝える物語なのである。

佳作

信念を貫く

筑波大学附属中学校 1年

荒井 あらい 雅佳 もとか

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行

「あなたがいうことはもつともですが、ぼくは増給がいやになつたんですから、まあ、ことわります。考えたつておなじことです。さようなら。」といいすて、門をでた。

赤シャツに呼ばれて突然言われた増給の話。腑に落ちない点があるものの、坊っちゃんは一度承諾をしている。古賀君の転勤は彼が望んだことであり、ここで増給の話を受け入れればその場を丸く収めることができる。そんな思いがあつたのかもしれない。とはいっても突然のうまい話に坊っちゃん
は気が気でならなかつた。夕食時、下宿のおばさんに古賀君の転勤話を振っている。赤シャツの話には裏があるに違いない。話好きなおばさんのことだからきつと周囲から何か情報を得ているのではないかと判断をしたためだろう。会話の中

で、古賀君の転勤は彼が望んだものではないことを知ると、坊っちゃんはその日のうちに赤シャツの家に押しかけ増給の撤回を申し出た。おぼさんの止めの言葉には聞く耳を持たず自分の意思を突き通したのだ。仲間が悲しい思いをしているのに自分だけ懷が暖かくなるのは良くない。金や威力で人間の心を買おうとしている赤シャツの手段が人として許せない。その思いが坊っちゃんの心を動かし増給を断る決断に至ったのだと私は思う。

以前、下女の清は坊っちゃんのことを「まっすぐで、よい気性を持っており、欲が少なく、心がきれいだ。」と褒めているが、坊っちゃんの性格は大人になっても変わらなかったことがこの行動からもわかる。生活環境が人間形成に影響すると言われるが、坊っちゃんの無鉄砲でまっすぐで感情的な部分は父親から、人情の厚さはいつも優しく接してくれた清から学んだものだといえる。そんな坊っちゃんの自分の信念を貫く姿に私は感銘を受けた。

今、坊っちゃんのように相手を思いやれる人、善悪の判断を間違わずにできる人、自分の考えを誰にでも言う勇氣がある人はどのぐらいいるであろうか？私はお金に関するニュースを耳にするたびに様々な思いになる。募金活動の話は聞いていて笑みがこぼれ、私にもできることはないかと心が動くが、一方で残念な使われ方をしているらしいという話を聞く

と、これからの未来に不安を感じて心が痛む。祖父に「たくさんのお金がないと人生は楽しめないのか。」と相談をする、祖父は笑いながら「人生を恐れてはいけない。人生に必要なのは、勇氣と想像力とほんの少しのお金だ。」というチャップリンの言葉を教えてくれた。驚くことに坊っちゃんの行動とチャップリンの考えは同様だったのだ。お金はあると便利なものだが欲張ってはいけない。私は周囲の方が笑顔の日々が送れるような使い方を心がけていきたいと思う。

人は他人と関わり合い、そして支え合いながら生きていく。その中で、坊っちゃんのように正義を貫くことが難しい時もあるであろう。そんな時は、一歩下がって考えて、一歩踏み出す勇氣があれば道を誤らずに進むことができると思う。正義を貫くことは多くの人の幸せにつながっていくと私は信じている。

佳作

心の音

長野清泉女学院中学校 1年

山路^{やまじ} 小百合^{さゆり}

作品名『吾輩は猫である』
選んだ一行

「のんきと見える人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする。」

「のんきと見える人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする。」

私が『吾輩は猫である』を読んで、一番心に残ったのは、この本の終盤に出てくるこの一文です。これは、中学の英語教師である苦沙弥先生のもとへ集まった、美学者の迷亭、哲学者の独仙、理学者の寒月、新体詩人の東風が、いつものように言いたい放題に話を楽しんで帰った後、寂しくなった座敷で吾輩が口にした言葉です。ここには、気楽に生きているように見えていても、実際には、みんなそれぞれに寂しさや悲しみや苦しみを抱えていて、決してのんきに生きている訳

ではないという人間に対する吾輩の鋭い洞察力が表れていて、とても深い言葉だと思います。

私自身、周囲の人から「何も悩みがなさそうでいいね。」「あなたはのんき者ね。」「辛い経験なんてしたことがないでしょ。」と言われたことが何度もあります。出来るだけ笑顔で過ごそうと努力しているので、確かに、幸せそうに見えるのかもしれません。でも、本当のところは違います。のんきそうに笑っていても、心の中では泣いていた、人には言えない悩みを抱えて苦しんでいた、辛いことや悲しいことは数え切れない程あります。この「のんきと見える人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする。」という言葉は、まさに私の気持ちにぴったりで、思わず吾輩に拍手を送りたくまりました。

表面だけで人を判断しないということは、人付き合いやコミュニケーションをとる上で非常に大切なことです。笑っているから楽しい、泣いているから悲しいではなく、その人の心の奥底に隠された本当の気持ちを汲みとることが何より重要だと思います。にもかかわらず、今の社会では表面的な付き合いが多くなり、本質を見ようとしない人が多すぎます。あの人にもきつと色々あるはず、本当はどうなのだろうと相手の心の底を思いやるのが出来れば、人との付き合い方が大きく変わり、一人ひとりのものの見方や考え方が変われば、

社会や国、そして世界も大きく変わるのではないのでしょうか。夏目漱石は、猫の目を通して、私たちに人間がいかに愚かな存在であるかを気付かせてくれているように感じます。

私は、この本から学んだ沢山のことと「のんきと見える人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする。」という言葉を教訓に、相手の「心の底」を汲みとれる人になりたいです。そして、また素敵な言葉に出会えるよう、夏目漱石の本に触れる機会を持ち続けたいと思います。

佳作

吾輩は猫であるの時代と現代

文京区立第一中学校 3年

藤岡 虹丞
ふじおか こうすけ

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」この一節は、日本文学において非常に有名で、世代を問わず、多くの人に親しまれています。

私がこの有名な一文を選んだ理由は、この物語の主人公の猫が語り手となり、この当時（明治時代）の社会を風刺しているのが現代と似ていると感じたからです。明治時代は、西洋文化が一気に流入し、社会や文化まで大きく変化をしました。それにより、新しい時代に適応しきれず自己を失う人や、知識の偽善を行う人までもが出てきました。夏目漱石は、このような社会の風刺を人間ではなく「猫」にやらせることでユーモアを交えながら批判しています。例えば、新しい文化

に影響を大きく受け自分のアイデンティティを見失いつつありました。それを、猫は、このような社会の中で人々が自己認識をどのように失い、流されているかを批判的に描いています。猫が自虐ともとれるようなセリフ「名前はまだない」と自己紹介を行うことで、自己認識やアイデンティティの不確かさを暗示し、それが当時の日本人全体の社会問題であることがここから分かります。また、西洋化への批判も描かれています。漱石は、この急速な変化が日本人に必ずしもいい変化をもたらし、幸福になるとは考えていなかったようです。猫目線を通して、西洋的な生活様式や価値観がどれだけ日本人にとって不自然で、マッチしておらず、無意味なのかを描いています。家庭内での西洋風な食事や服装に猫が冷たい視線を注いでいるのは、無理に西洋化を進めようとする社会に対する風刺と解釈できます。

このような風刺は現代の日本の社会にも多くあてはまると感じます。承認欲求や、文化と技術への過信、知識社会の問題など多くのことがこれに当てはまります。現代社会は、昔よりもさらに情報に溢れかえっている社会になっています。また、知識人が知識だけを持っていて、現実の問題解決には無力である状況は昔と変わっていません。むしろ、ひどくなっていると感じます。そして、技術への過度な過信も否めません。現代は、高度な技術が沢山あります。その例として、ス

マートフォンや人工知能、ロボットなどが挙げられます。これらは、現代人の生活を便利にする一方で、社会的な孤立や精神的な問題が増加している現象が見られます。これは、漱石が心配していた急激な社会変化によるアイデンティティを見失い、文化の変質は、今日のデジタル社会にも当てはまる問題です。

私は、これらの社会問題を考えて感じたことがあります。人間にとっての大きな変化は良くも悪くもあるということです。今のデジタル社会で生きている私の生活はとても便利な反面、自分を心身共に守ることに必死な気がします。親の目を気にして、嫌いな勉強をして、行きたくもない学校に行ったり、友人の動きを無意識にSNSで追ってしまったり、他人と比べてしまったり身体だけではなく、心の健康まで守らなくてはならないのは、この時代独特のものだと私は感じます。漱石が、描いた人間の本質的な性質や社会の理不尽や矛盾は、時代を超えて共通するテーマであり、現代の視点から再解釈することで新たな発見が得られるように感じました。

高校生の部

最優秀賞

漱石から受け取った信念

光塩女子学院高等科 3年

佐伯 理奈
さえき りな

作品名『私の個人主義』

選んだ一行

その時確かに握った自己が主で、他は賓であるという信念は、今日の私に非常の自信と安心を与えてくれました。

「私の個人主義」は、大正三年に夏目漱石が学習院の学生たちに向けておこなった講演の記録だ。自身のさまざまなエピソードを取り入れ、丁寧に、ときには自虐も含めた漱石の講演内容は、小気味よく、生き生きしていて決して色褪せていない。まるで現代の課題を熱く論じているかのように感じたのと同時に、自分の内面と深く向き合う自己対話の重要性に気づいた。

現代社会では、SNSの「いいね！」や同調圧力によって個人の意見を述べることをためらったり、インターネット上

のクチコミや評価の星の数に決定を左右されたりと自分を見失いがちだ。生成AIにコマンドを入力し、表示された回答を自分の意見だと勘違いしている人もいる。SNSやインターネットは私たちの生活を便利にし、人と人がつながることも容易にしたが、一方で閉塞感や孤独感を募らせる人も多いと聞く。それは、私たち現代人が自分が主であるという意識を持ち、自らの意思で道を切り開く「自己本位」を手放して、他者の判断に従うのが当たり前の「他人本位」に支配されているからゆえに起きているのかもしれないと感じた。

読後、私は自己対話の機会を習慣づけ、判断や行動が自分の意志に基づいているかどうかを常に問うようになった。また、漱石が語ったなかで、ひととき凛とした強さを帯びた矢となり私の胸に刺さったのが「自己が主で、他は賓であるという信念」である。一見、自分勝手や利己主義にも聞こえる言葉だが、その真意は自分の意志や価値観を重視すると同時に他者の意志や価値観も同等に尊重するべきという漱石からの強いメッセージだ。私は多様な個性を尊重することの重要性は最近になって言われ始めたのだと考えていた。しかし、百年以上前の漱石が若者たちに語った内容には、既に多様性社会を構築する必要性が示唆されていることにまず驚き、端的に表現された信念の凛々しさに感銘を受けた。それからの私は毎回の自己対話のなかでこの信念をリマインドしてい

る。そうすることで変化が起きた。私は他者の意見への否定や噂話への同調、憶測での発言をすることを一切しなくなったのだ。私は「他人本位」から解放されて「自己本位」を手に入れ始めたのだろう。そして、自分を認識してこそ、他者を重んずることができるのだと確信した。そう、多様な個性を尊重する社会をつくる第一歩は自分自身と向き合うことなのだ。

漱石は講演で若者に未来を託した。そして、百年以上の時間を経て、現代の若者である私が受け取った。「自己が主で、他は賓であるという信念」を胸に、誰もが自分らしく輝ける社会の実現のために行動していこう。そう決意した。

審査講評

現代社会のSNSやインターネットなどで得たもの、失ったものから自己本位の価値に気付き、自己対話の重要性に論理を進めたところが良い。また、自己と他者を見つめ、未来に向かって行動する姿が表れている。

朝日新聞社賞

内なる感情の重み

学習院女子高等科 2年

佐野 さの
帆南 ほなみ

作品名『こころ』

選んだ一行

私は今よりいつそう寂しい未来の私を我慢する代りに、寂しい今の私を我慢したいのです。

キャラを作る、という言葉がある。漫画やアニメのキャラクターのように、わかりやすく、「この人はこうだね」と一言で表せる象徴を作る。社会に適応するため、自分にわかりやすい符号をつける。それがキャラを作るということだ。それは若者である私も例外ではなく、やはり「ツツコミ・ボケ」「可愛い・かっこいい」等わかりやすい符号を望んでしまう。そして同時に、私はキャラクターも私の人間関係も共にどこか表面的で薄いように感じることもある。現実であるのに現実ではないような、漠然とした違和感を持つてしまう。そんな、私が頭の中で捉えていた拭えない気持ちを消したの

が先生だった。先生は作中で確かに生きていた。弱い部分を抱えた先生は、最も人間だった。

「寂しい今の私を我慢したい」

私は先生の事情を知らぬまま、この言葉を読んだとき、先生が「キャラクター」を超えて、そのまま目の前に存在しているような心地がした。今まで散々主人公の「私」に他人を信用できない等と伝えていながら、寂しいと零してしまう所。聞かないほうがいいというながら結局過去を話すそぶりを見せる所。物事をわかつているように話すのに、自身はわからないと嘆く所。そして後半で明かされる、あまりにも膨大な先生の感情の連なり。矛盾に満ち自分の内なるものの大きさに呆然とする先生を、誰よりも人間らしいと思った。

精神的に弱い部分がある、という言い方をするところがあるが、それを言い換えるとすれば矛盾があるということだと、私は思う。人の中にはあまりにも沢山の感情の引き出しがあるのだ。中には私たちが感じたことのない感情もあるのだろう。その出し入れの中で矛盾が生まれたり、新しい感情が出てきたりすると人間は戸惑い苦しむ。自分の奥底にある沢山の感情の連なりが人間だと思う。小説という符号をもって展開されるエンタメの中で先生はそれを証明しているように見えた。

結局先生はKのことを私に話し亡くなってしまいうわけだ

が、先生はKに囚われたわけではなく自分の弱い部分に囚われ続けていたように感じる。過去と未来に生き、己の弱さを知っていたからこそ、先生は人を信じることも自身を信じることもできず、私にさえ直接過去を打ち明けることもなく死んだ。そんな先生を見つめて、私は直接自分の弱さを見つめているような気持ちになった。わかりやすいキャラクターで自分の醜い感情を隠す。すなわち、空気を読む。それが癖になって、無意識に負の感情に目を背ける自分がいることに気が付かなかった。こころを読み終え、自分に焦点をあてた時、私は苦々しい気持ちになった。

いつの時代も内なる感情を抱えて生きるのが人間だ。その重みとの向き合い方の正解が、私はまだわからない。

審査講評

人間とは何者か、悩みながら模索を続ける筆者の精神の成長が伝わってくる。

紀伊國屋書店賞

私の鏡になる

東京都立桜修館中等教育学校

2年

野村 のむら
英 えい

作品名『夢十夜』

選んだ一行

自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなった。

抗うに抗えぬ大きな力が、生きていればあるという。幸い私がそのような力に潰されそうになったことはまだない。この物語の彼は潰されてしまう人であった。

夢十夜、第七夜。「自分」は覚えのない大きな船に乗っている。どこに行くかもわからない。「詰まらなくなっ」て、とうとう海の中へ飛び込むが、足が離れた刹那に命が惜しくなる。

この物語は最後の一行まで「自分」が死なない。「無限の後悔と恐怖を抱いて」いつまでも海へ落ちるのだ。大きな船はまるで時間そのもののようである。彼が入水した瞬間から

着水までを無限のように感じるのも、時間という概念から外れたからと考えられる。

私だけでない、きつとすべての人が、時間について疎ましく思っている。時間の融通の利かなさといったらない。それはこの物語の大きな船のように、人々を乗せてぐんぐんと進んでいく。時折、時間に終わりはあるのか、いったいどこに向かつていくのか、止まってくれはしないかと、不安になったり悲しくなったりする。それでも時間は知らないふりで進んでしまう。しかし第七夜の本質は時間ではない。時間が持つような、抗えぬ絶大な力である。

話は不安を残して終わる。読み終えて私が大きな船と重ね合わせたのは、これまで私が苦笑いでごまかしてきたどうしようもなさであった。父の単身赴任も、母の決断も、今思えばそうであった。本当にすんなりと事は進んだ。私は悲しくなかった。それは抗いえず事情に対するあきらめとも言えよう。私はあきらめが良いのだ。したがって、私がこの物語の、この大きな船に乗り合わせたとしても、飛び降りたりはしないだろう。一方で「自分」は違った。彼にはどこへ行くのかわからないことが耐えられなかった。そうして海へ飛び込んだ。

この物語では主人公の心情は変化しない。成長などはない。ただ一貫した「自分」がいる。淡々とした書き口からも見受

けられるように、彼は大きな力に対する向き合い方の、ひとつの凡例に過ぎないと思う。彼を無限の後悔にさいなますことで、正しい心の持ち方はこうであるという明確な「正解」も出ずに終わる。

ではなぜ私はこの一行を選んだのか。それは鏡のようであったからだ。この物語は我々に、生きろ、などと言わない。変わることを勧めることもない。この男はこうだった、それであなたはどうか生きているのですか、と読者自身に問いかけてくるような読後の余韻。そうして我々はまっすぐに鏡を見据える。私は何をどう乗り越えてきたかを知る。どう乗り越えたいかを考える。

審査講評

中盤に挿入される自身のエピソードと、結末に配置された鏡の比喩が詩情を誘う。

新潮社賞

なき声

仙台育英学園高等学校 1年

横倉 陽太郎
よこくら はるたろう

作品名『文鳥』

選んだ一行

世の中には満足しながら不幸に陥って行く者が沢山ある。

縁側で文鳥が鳴く。千代々々、千代という美しい声に、私はかなしみが混じるのを聴いた。

この小説は、友人の三重吉の勧めで文鳥を飼うことになった漱石の日々と、文鳥の淡く繊細な美しさ、そして、その死とを描く。漱石の元に文鳥がやってきたのは、初冬の晩である。始めこそ可愛がっていた漱石だが、一日、また一日と過ぎる程に、その世話が億劫になってきた。一度家人が世話をしてくれてからは、尚更怠けた。餌やりや糞の掃除を忘れることも多くなった。そしてある日、文鳥は鳴かなくなった。

三重吉の飼っていた文鳥は、三重吉の顔を見るとしきりに鳴き続けたという。しかしこの文鳥は漱石の顔を見ても鳴か

なかった。むしろ、鳴くのは漱石が眼前にいない時ばかりであった。漱石は文鳥が鳴くのは元氣な証拠だと思っていた。しかし、私の頭で響いた「千代千代」は、悲痛で、かなしい色をしていた。

文鳥は漱石を呼び続けていたのだと思う。愛を求めているのだと思う。けれど同時に、漱石の愛が死んでいくのもわかっていたのではないだろうか。

そして、ついにその日は来た。

その朝、漱石は知り合いの縁談に片を付けようと思い立った。

「いくら本人が承知だって、そんなところへ嫁に遣るのは行末よくあるまい」

「世の中には満足しながら不幸に陥って行く者が沢山ある。」などと考えながら、家を出た。文鳥のことはすっかり忘れていた。夕方、家に帰ると――文鳥は籠の底で冷たくなっていた。

漱石は、餌や水をやってさえすれば文鳥は幸せだろうと思っていた。けれど、それは違う。本当に枯らしてはならないのは、愛である。それは、生き物を迎えた瞬間からの、生き物との約束である。漱石はそれを守れなかった。かなしみに気づいてやれなかった。幸せだと思っていた文鳥は死んだ。

「世の中には満足しながら不幸に陥って行く者が沢山ある。」

この時、漱石はその一人だったのかもしれないと思った。

審査講評

愛を求める文鳥とそれに気づけない漱石、という自分なりの『物語』を創り出した。そして、この物語を、自身が選んだ一行にうまく重ね合わせている。

東京理科大学賞

広い海で舵を取る

恵泉女学園高等学校

2年

相川 遥 あいかわ はるか

作品名『夢十夜』

選んだ一行

自分はつまらないから死のうとさえ思っている。

途方もなくつまらない毎日が際限なく続いている。人生は大きな海に漕ぎ出した頼りなく小さな船のようで、この船の行先は分からず、その上いつこの旅が終わるのかもわからない。そんな中で死をもつてしてこの毎日の連続から抜け出したいと考えることは、当然なのではないか。

私は、この一文が載っている第七夜には夏目漱石の死生観が強く表れていると考える。物語中の「自分」が乗っている船を人生、そしてその終わりを死と捉ええるとする。船に乗客は沢山いるのにも関わらず、「自分」には親しく話せる友人がいない。その上私の人生がどこに向かっているのかもわからず、ただ日々を空費している。そんな中で「自分」はずっ

と自殺を試みているのだ。「つまらないから死のうと考えている。」これは当然のことだ。私達が死にたいとよく口にするように、長く終わりの見えない日々は私達を辟易させる。夏目漱石をはじめ、私達が死にたいと思うのは当然のことである。しかし私にはこの淡々と死を願っている一文が、どうにも哀愁を孕んでいるように思える。たった二十二文字のこの一文に、夏目漱石は生と死の狭間で葛藤する青年の複雑な感情を託したのだ。そこにはやりたいことも、向かっていきたい先もない自分の人生への失望や、何もせずとも訪れる日々への疲れ、そしてそれらが原因となり自分を苛む心細さが絡まり合い、大きな感情となり淡々とした文に隠されているが、からもその哀愁が見え隠れしているのだ。

そしてこの一文の後、「自分」は船から身を乗り出して自殺する。その時「自分」は何を思うだろうか。死のうと思っていた日々から解放され、やっと死ぬことが出来たのだ。大義を果たした達成感か、ある種の清々しさを抱くのではないかと私は読みながら考えていた。しかし夏目漱石の考えは全く私のものと異なっていた。「自分」はたまらなく後悔するのだ。足が甲板を離れたその時から、よしておけばよかったと心から思うのだった。このもはや手遅れである後悔の、なんと残酷なことか。

第七夜には夏目漱石の死生観が色濃く表れている。そして

それと同時に、私達へのメッセージも強く描かれていると私は考える。どんなに今が退屈でも、死ぬ時には後悔するのだから自ら人生を放棄せずに生き抜きなさいという教えがこの物語の背景に隠されているように私は考えた。退屈さは体に毒だ。退屈であるところにも悪い方へと思考が向かっていき、それはやがて死に至る。そうならないように、私達は主体的に生きていかなければならない。この船の向かう先は一体どこだろうかと悶々と考えながら眺めているのではなく、自ら舵を取るのだ。

「自分はつまらないから死のうとさえ思っている。」これは私達へのメッセージだ。私達はこの言葉を反面教師にして、生きていかなければならない。

審査講評

長く終わりの見えない日々は私たちを辟易させているけれども、このことが人間の本性として哀愁を孕んでいることに気づいた若者の感性が素晴らしい。

二松学舎大学賞

時間を越えた究極の愛

光塩女子学院高等科 2年

山田 やまだ 莉緒 りお

作品名『夢十夜』

選んだ一行

「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」
「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」

「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」これは、「夢十夜」の第一夜、生死の境目にいる女が最期に男に掛けた言葉だ。「夢十夜」は漱石が十の夢を見たという形で書かれている。その中でも第一夜では男と女の純粋な愛が描かれており、幻想的で美しい夜だ。私は、男が女をありのままに受け止める姿を美しいと感じた。しかし同時に、その純粋な愛の裏にある偏執的な愛に不気味さを感じたのだ。一人の存在をありのままに受け入れようとする男の姿は、漱石が希求した虚偽の無い愛を具現化したものかもしれない、この作品の持つ引力に私は抗えなかった。

女は終始静かな声で話している。しかし、私の選んだ一行である最期の言葉は、声の調子を一段張り上げて言い放たれた。この言葉は、女の渴望の表出であつたに違いない。ただ

ただ自分の墓の傍に座って待つて欲しい、私だけを愛して欲しいという女の願いに、私は傲慢さや男に対する強い執着心を感じてしまった。さらに、百年は現実世界では些か長すぎ、観念的な時間ですらある。夢の中でしか達成し得ない程の時間を待つていて欲しいという女の願いは非常に重く、純粋な愛の裏にある偏執的な愛や不気味さが垣間見えた。女はやがて息を引き取る。その後、男は女を庭に埋め、約束を果たすべく女の墓の傍らに座つてその時を待ち続ける。この男の姿は、女との約束を守ろうとする誠実さを感じさせる一方で、約束通りに百年を待ち続けようとする、ある種の狂気が感じられた。

物語の終幕、女は美しい百合の花に姿を変えて男に逢いに来る。そして男は白い花びらに接吻をする。男は女の偏執的な愛を受け入れたのだ。この行為は、待ち続け、そして男が自ら女の愛を受け入れにいったことを意味するのではないだろうか。不気味さすら感じさせる愛や異常な執着を抱く女を否定も批評もせず、そのままの姿をありのままに能動的に受け入れたその瞬間、男と女は念願の再会をし、約束は果たされた。お互いに再会するためだけに百年という長い時間を費

やしたことは、紛う事なき一つの愛の形であり、私はそれを美しいと感じた。

この作品の魅力は、描写の優美さだけでなく、現実には無い時間が静かに流れているところにもあると思う。百年という長い時間を待ち続けることは現実では不可能であるが、漱石は卓越した筆力で、美しさと不気味さを内包する世界を描き、不可能を可能にした。私は、時間をも超越した究極の愛を感じた。漱石の希求した「一人の存在をありのままに受け入れること」は、漱石だけでなく私たち読者も希求して止まないものであろう。私も、相手を疑うこともなく、虚偽や欺瞞も無く、ありのままの互いを受け入れ合うような関係を築きたいと切に思った。他者の、綺麗な部分も醜い部分も全てを肯定できる人間になりたいと切に願った。

審査講評

「夢十夜」「第一夜」の愛と美に正面突破を試み、かなりの成果を挙げる感性和筆力に驚いた。現代の若者の能力の高さを改めて知らされた。

くまもと賞

猫の目に映るものは

光塩女子学院高等科 2年

稲垣 いながき ころろ

作品名『吾輩は猫である』
選んだ一行

自然は真空を忌むごとく、人間は平等を嫌うということだ。
すでに平等を嫌ってやむをえず衣服を骨肉のごとくかようにつけまとう今日において、この本質の一部分たる、これらを打ちやっつて、元の空阿弥の公平時代に帰るのは狂人の沙汰である。

『吾輩は猫である』において、コミカルかつシニカルな「吾輩」が人間の本質を剔抉し痛快な洞察をする姿に、みるみる引き込まれた。私が選んだ一文は、銭湯で裸の人間がうごめく光景を目撃した「吾輩」が、人間の競争の歴史を分析して得た知見である。「吾輩」は、人間は衣服によって人間たりうるのであり、裸の人間はすべて猫に劣る獣だと断言する。

「吾輩」は、やはり教師の猫というべきか、その豊富な知識を持ち出して、飄々と衣服の歴史を繙いていく。それが頗

る面白い。ある者が他者との差異を図るべく苦心して猿股を發明し、大いに威張って幅をきかせるようになると、今度は誰かが羽織を發明し、次いで袴が發明されるのだ、と猫は語る。私が着ている服も人間が必死に「他の誰でもない自分」であろうともがいた結果なのかと思うと、おかしさがこみ上げる。「おれはお前ではないぞ」と見せつけたり、他者よりも優れていることを誇示したりするための衣服の歴史を人間が辿ってきた以上、他者と比較せずに過ごす公平な時代、つまり赤裸の時代に戻ることは不可能だと、「吾輩」は分析する。

何故人間は平等を嫌うのか。私は、人間が他者との比較なしでは自身を認識できないからだと思うのだ。平等を嫌う人間の姿は、他者との差別化を図るのが人間の本質だということを示唆するのではないだろうか。人間が平等を嫌うという指摘は、自分と異なる他者の存在を受け入れる、その難しさにも気づかせてくれた。人間は、何百年もの間懲りずに衣服を發明し続け、ついには衣服と人間のどちらが主なのか分からなくなってしまうほど、衣服で他者と区別された「他の誰でもない自分」を誇示せずにはいられない。だが、他者もそのように考える人間である以上、人間の競争の歴史は、終わることがないのだ。

小さな体で、人間の愚かな本来の姿を次々と暴く「吾輩」の姿は滑稽だ。だが、彼が漱石の代弁者だということを忘れ

てはいけない。『吾輩は猫である』の愉快な筆致の中に存在する、人間の本質を穿つ「吾輩」の卓越した洞察力に、我々は時を超えて夢中になってきた。それは猫が描き出す人間本来の姿に、自分の姿が重なるからだだろう。

私にとっての「衣服」、すなわち「他の誰でもない自分」を象徴するものは、言葉に対する敏感さだ。自分が発した言葉が、他者を感じさせているという実感や、海のように広がる言葉を自由に操っている感覚は快い。私も、連綿と続く人間の「衣服」の歴史に名を連ねる一人だったのだ。

漱石はこの作品の自序に「ただ長えに変わらぬものは甕の中の猫の中の瞳だけである」と記している。「吾輩」の目に、今の私たち人間はどのように映るのだろうか。諧謔味あふれる文体の裏に潜む、鋭い人間の本質の指摘に目を向けて、自身を振り返ってみるのも一興だろう。

審査講評

面白い一点をとらえている。「平等を嫌う人間」についての考察は鋭く、漱石の批評眼を自己に投影させていく過程の表現がすばらしい。

佳作

それは種

神奈川県立湘南高等学校 2年

嘉悦 千代

作品名『こころ』

選んだ一行

私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそんな琴の音に耳を傾けました。
に耳を傾けました。

私の選んだ一行『私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそんな琴の音に耳を傾けました。』では、先生が身を寄せることになった家の娘の生花や琴を鑑賞する先生の、行動・心情両面が一文で巧みに表現されている。

父の影響でこういった趣味を『何時の間にか軽蔑』していた先生が、あろうことか不出来なそれらを好意的に捉えている表現はどこか矛盾のようなものすら感じる。しかしこの違和感を足がかりにして嗅ぎとれるのは、先生が生花や琴の音ではなく、その表現者たる娘に価値を見、好意を寄せている、つまりこの娘が創り出したものだからこそ愉しんでいるとい

う事実だ。先生の娘への恋心は今後物語に絡みつき続けるが、それが初めて顕現したのはこの表現であろう。ここで私は、先生の生活の中の行為と娘への好意を一度に表現する技巧もさることながら、この場面で読者に魅せる「恋」の性格の特質という点でもこの一行に強く惹かれた。

その特異性とは、純粹さであり、初々しさであり、清廉さである。私はこの物語中に二種類の「悪い恋」を見出したが、それらを十分迎え撃って浄化できるほど、先生の中に恋が生まれた瞬間のピュアさは美しく印象的だった。私が見た「悪い恋」とは、一に「罪である恋」、二に「罪になる恋」である。前者は「私」が先生夫婦から妄想するようなもの、或いはアダムとイヴの神話における「恥じらい」にも通じる、当事者に起こる理性を溶かすような心情で、後者は『恋は罪悪ですよ』が暗示するであろうKと先生を悲劇に誘ったような二次的な悪影響を引き起こすものだと考えている。このようにこの物語の人間関係の根幹には「悪い恋」が潜みがちで、事実先生のKへの嫉妬などは明確に描写される。だからこそそれの対に存在するような純な恋心は清らかで可愛らしく映るのだ。恋を、悲観し、（読者や「私」に）悲観させる先生にすら綺麗な恋の芽生えがあったことは喜ばしい一方で、そのこじれるものだけで容易に悲劇を呼びよせることへの絶望感も、その落差から感じさせられる。

さらにこの一行は、「あなたでさえあれば」というような、恋愛に絶対的に担保された幸福感を象徴的に表してもいると思う。「恋は盲目」とはよく言ったものだが、この現象は突き詰めれば『本当の愛は宗教心とそう違ったものでない』という表現につながるだろう。

以上のように本作における恋は時に害になり害を成しながらあらゆる方向に成長しストーリーという土壌に根を張っていることが随所からわかるが、その種となったのはまごうことなき純な青年の恋であることが、この一行から確かに感じとれるのである。そんな白いエネルギーこそ、まさに物語の種とするのにふさわしい、この一行ならではの恋の性格からくる力だといえるだろう。

佳作

裁くということ

恵泉女学園高等学校 2年

蛭田^{ひるた} 江奈^{えな}

作品名『ころ』
選んだ一行

あなたはなぜと言って目を瞠るかもしれませんが、いつも私の心を握りしめて来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い止めながら、死の道だけを自由にするために開けておくのです。

本来の意味で人を裁くとはどのようなことを指すのだろうか。誰かが犯した罪について定められた法に則り処罰を与えらるということが、裁くということなのだろうか。裁くことによってその罪は浄化されるのだろうか。私はずっと疑問だった。しかし、「ころ」を読んで少しだけ裁くということの意味が理解できたように思う。

「あなたはなぜと言って目を瞠るかもしれませんが、いつも私の心を握りしめて来るその不可思議な恐ろしい力は、私

の活動をあらゆる方面で食い止めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。」この一文は、自殺を心に決めた先生が自分に対して畏敬の念を抱く一人の青年に送った手紙の中の一行である。

先生は、ずっと死と身近になりながら生きていた。Kより女を慕う気持ちを取り、Kを間接的に殺してしまったかもしれない自分。最も憎かった叔父がしたことと同じようなことを親友にしてしまった自分自身を先生は信じず、許そうとしなかった。そして明治天皇の崩御というきっかけを持ち、自分を裁くことに決めたのだ。私は先生にとっての裁きとは、許しの裏返しのように思えた。Kを苦しめた罪を信賴していない自分自身の手で裁くという重い苦しみを受ける代わりにKのことで苦しむ自分を解放させたのだ。

現代の日本では、自分で命を絶つということに対して触れてはいけなもののように扱ってきたように感じる。安楽死が認められていないのも自死を認めない日本の象徴であるように見える。しかし、「死にたい」と思ってしまうほどに苦しみ、思い悩む誰かが、自分を生きていることで生まれる辛さから救うための手段として自死を選ぶことを否定できる人はいないと思うのだ。

この本を読んで、罪を「裁く」ということは、自分や他人が持つ罪の責任を「許す」ための行為であるように考えるよ

うになった。おこってしまったことは取り返しが効かず、発生した罪は誰にも無くすることができない。自分や他人を罰することです。少しでもお互いを許し合えるように、楽になれるようにするために「裁き」が存在するのだ。先生は自分自身を許し、生きている内は到底救われない自分と決別するために自分の命を断つという決断をした。これは誰にも否定することができず、尊重されるべき許しの形なのではないか。私はそう思う。

佳作

個人主義と「淋しみ」

光塩女子学院高等科 2年

味原 あじはら
花帆 かほ

作品名『こころ』

選んだ一行

自由と独立と己とにみちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう

漱石が『こころ』で描いたのは、欧米列強に追いつこうと近代化政策を推し進める政府の主導により西洋から多様な文化や思想が入ってきた明治末期の世。当時の人々は「個人主義」という真新しい概念に魅かれていた。彼らは個人主義を、身分や出自などのしがらみから離れて己れの心の動くままに振る舞うことと理解し、個人を神聖化し、絶対的価値を持つものと捉えていた。その潮流に漱石は警鐘を鳴らす。漱石は『私の個人主義』の中で「義務心を持っていない自由は本当の自由ではないと考えます。」と指摘している。漱石は自由

と義務を併せ持つ個人主義を主張したのだ。彼は外発的な開化による個人主義の興隆に疑念を抱き、当時多くの人の目に魅力的に映っていた個人主義の限界を『こころ』の主題としたのだと思う。

主人公の「先生」は、友人Kと同じ女性に恋し、彼女との結婚を決めるが、それを知ったKは自ら命を絶つ。自分の不誠実さと卑怯さを自覚した「先生」は自己嫌悪に陥り、それ以来、人との関係を遮断し孤独に生きるようになる。一方彼の辛い過去を何も知らない若い「私」は独立した世界を生きるかに見える「先生」を尊敬し、師弟関係を築くことで自分を認めてもらいたいと強く思っていた。孤独と満たされない思いを抱え先生の元へと足繁く通う「私」も、策で友人を裏切るといふ自身に失望して他者との関係を遮断した先生も、向上できない自分に見切りをつけ死を選んだKも皆、宿命としてこの淋しさを味わっている。「先生」は「私」に「自由と独立と己とにみちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」と伝えた。

漱石が「自由と独立と己とにみちた現代」と表象した明治時代を生きる「私」は、自分の存在意義を探し求める。他者との関係が希薄になり、自分の位置付けが不明確になった時、人は否応なしに孤独を引き受けなければならない。それが「淋

しみ」なのではないか。

私はこの一文を読んで現代社会に当てはめずにはいられなかった。己れの自由を主張するあまり、自分の自由と他者の自由との対立に折り合いがつけられなくなり、結局は自我が暴走し、エゴイズムに翻弄されることがいかに多いか。批評眼を持った漱石は、「自由と独立と己とにみちた現代」を生きる者を待ち受けるのは「淋しみ」だと指摘した。その指摘は、百年以上経った今なお私たちに響く。自分の「自由」「独立」「己れ」を主張する以上、他人のそれらを尊重しなければならぬ。そうすると他者との相克が避けられない。結果として周囲と繋がることや理解し合うことが難しくなり、「淋しみ」が生じる。漱石は自由が尊重されるという点で評価された個人主義が実は「淋しみ」の元凶となり、「自由と独立と己とにみちた現代」を生きる人間が「淋しみ」に直面するのは宿命だと考えたのではないか。

佳作

死と時

光塩女子学院高等科 2年

遠山 奏子
とおやま かなこ

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行

それを俳句の好きなある男が嬉しがって、わざわざ私に頼んで、短冊に書かせて持って行ったのも、もう昔になっちゃった。

『硝子戸の中』には、漱石を苦しめる虚偽やエゴイズム、他者との交渉によって明らかになる価値観の相克等、人生における様々な葛藤や思いが書かれている。漱石は幼少期の義父母との関係の中で愛情の裏に潜む虚偽やエゴイズムに苦しめられた。そんな漱石は、虚偽や欺瞞を嫌厭し、純粹な愛情や関係性を希求するようになる。そして死を、エゴイズムや時の力とは無縁の限りなく洗練されたものであると考えるようになった。漱石の、純粹さや透徹性への希求が根底にある死を理想とする価値観はまた、彼が過去に触れてきた数々の

死によって形成されたといってもよいかもしれない。

漱石がこの随筆中に書き記し特に心が抉られるエピソードに、大塚楠緒の死がある。楠緒は、日露戦争に際し厭戦的な詩「お百度詣で」を表し、また『露』等小説を発表した^{けいしゅう}作家だ。ある日漱石は道で楠緒を見掛けるが、その美貌に見惚れ後に楠緒に「芸者かと思った」とその時の感情を素直に伝えた。楠緒はその言葉をそのままに受け取る。漱石は自分の言葉を邪推せずに真っ直ぐに受け取った楠緒との間に、強固な信頼に裏づけされた理想的な関係を感じたことだろう。楠緒は漱石にとって、虚偽や欺瞞の対極にある自然体で生きる女性であった。

選んだ一文の「それ」とは、楠緒が亡くなった際漱石が楠緒に^よ詠んだ追悼句「ある程の菊抛げ入れよ棺の中」を指す。季語の「菊」は楠緒の凜とした清楚なイメージを喚起し、中七の句に「抛」の字をあて命令形で切ることにより、死に目に会えなかった悔恨の情、慟哭の思いをして楠緒の早逝という不条理な運命に対する憤り等の激情を一気に投入している。また「棺の中」と下五を体言で止め、また句全体にK音を多用したことから、冥福を祈る^{しょうこん}莊嚴の余情に浸りつつ、楠緒の内外面の美しさや楠緒を失った率直な悲しみ、楠緒との虚偽の介在しない関係等楠緒に関する一貫した透明な印象を表している。楠緒の死を嘆くこの句は、人生の無常を穿つ漱

石の絶唱の追悼句なのだ。

「それを俳句の好きな男が嬉しがって、わざわざ私に頼んで、短冊に書かせて持って行ったのも、もう昔になってしまった。」の一文を選んだのは、人間の死、そして時の力に対する漱石の想いが滲み出ていると感じたからだ。楠緒を奪った運命に対して激情を覚えた日も、時の中によって完全に過去のものになってしまった…。楠緒の死を思い出しても過去の激情が甦らなくなったことは、時の力によって楠緒の死の傷が癒えたと同時に漱石の中での楠緒の存在が薄れたことも意味する。これは治癒力と残酷さを併せ持つ、時の両義性もたらした当然の帰結だ。楠緒の死に際して、漱石は自身の感情や価値観の変化と、それに伴う苦悩や葛藤を経験したであろう。しかし私は、そのすべてをきくと楠緒は真っ直ぐに受け入れてくれると思うのだ。

佳作

僕と三四郎

サレジオ学院高等学校 2年

やまもと
山本 憲

作品名『三四郎』

選んだ一行

そうして現実の世界は、かように動揺して、自分を置き去りにしていつてしまう。

私が『三四郎』のなかから選んだ一行は、「そうして現実の世界は、かように動揺して、自分を置き去りにしていつてしまう」という文である。熊本の田舎から上京し、見たことのない世界に対して三四郎が感じた気持ちを表している。

私は今年の夏休み、初めての海外一人旅として台湾に行った。事前に歴史や食べ物について下調べをし、自分なりに語学を身に付けて旅立った。異国に到着したとたん、何だか不思議な感覚に見舞われた。自分は確かにその国のなかにいる。しかし、三四郎の言葉をさらに借りるなら、「自分の世界と現実の世界は、一つ平面に並んで居りながら、どこも接触し

ていない」気がしたのである。まるでYouTubeで映像を見ているかのような錯覚。自分は本当に目の前の世界の登場人物の一人として存在しているのか、どうにも心もとない気がしたのだ。自分がそこに属していない感覚、とてもいおうか。異なる景色や匂い、歩く人のペースなど、全てが少しずつ異なっているのだ。私は心を落ち着かせて、異なる環境に少しずつ適応していった。

三四郎が上京した時代、明治の激変期にあった熊本と東京の差は、現代の日本と台湾の違いよりも大きかったかもしれない。

私が台湾で感じた「置き去りにされた」感覚は、異国の文化や習慣に対する戸惑いから生まれたものだった。例えば、日本語の通じない言語空間に適応するのには少し時間がかかった。しかし、三四郎が東京で感じたそれは、さらに深いものだったのではないかと感じる。熊本から上京した彼にとって、東京はまるで異次元のように現実が揺らぎ、自分がそこに存在している実感を持たない場所だったのだろう。

三四郎の言葉は、彼の内面の揺れ動きや、時代の激変に対する不安を象徴している。新しい環境に飛び込んだ彼は、自分の価値観や世界観が通用しない現実と直面し、そこに「置き去りにされた」ような感覚を抱いたに違いない。彼にとつて東京は、単なる物理的な移動先ではなく、自分自身の成長

や変化を強いられる場所だった。

私自身も台湾での経験を通じて、異なる世界に対する不安や戸惑いを感じたが、それが自分の成長の一部であると気づいた時、少しずつその感覚は和らいでいった。しかし、そのプロセスを経てこそ、私は新しい価値観を身につけることができたのである。三四郎もまた、東京での生活を通じて、自分の中にある固定観念や価値観を見直し、新たな視点を持つようになったのではないかと思う。

佳作

漱石と開化

サレジオ学院高等学校 2年

山本 祥太郎
やまもと しょうたろう

作品名『社会と自分―現代日本の開化―』
選んだ一行

現代日本の開化は皮相上滑りの開化である

「現代日本の開化は皮相上滑りの開化である」

この一節は明治四十四年に漱石が和歌山県議会議事堂で行った講演「現代日本の開化」によるものである。大正二年発刊の漱石の講演集「社会と自分」に収録された。「社会と自分」の序文で漱石は「此講演集の名を講演集としないで、「社会と自分」としたのは、何れの講演も其主意を抽象して引き括れば、要するに皆社会対自分の関係を研究したものに過ぎないからである。」と綴った。従って、この講演は急速に西洋文明を取り入れた日本の社会の変革をその目で見た漱石の思いをけげやかに映し出した貴重な資料であると言えよう。

日露戦争に勝利し一等国になったと驕り高ぶる者が大半で

あった当時の社会を、漱石が憂いていたことは確かである。明治四十一年に朝日新聞で連載された漱石の小説「三四郎」で主人公は汽車で乗り合わせた男に「これからは日本もだんだん発展するでしょう」と言う男に「滅びるね」と返答される場面がある。愛国が広く謳われた明治日本の社会に対し、汽車の男の言説を唱えたことには、漱石の深い思惑があると推察する。ここで注意しなければならないのは、漱石は国家主義を否定している訳ではないということだ。かといって、欧化主義に疑問符を浮かべた漱石が国粹主義を信奉した訳でもないということは更に重要である。そのことは、私の選んだ一節の直後に言及された「しかしそれが悪いからお止しなさいと云うのではない。事実やむをえない、涙を吞んで上滑りに滑って行かなければならないと云うのです。」という部分からも明らかである。

前述の様な漱石の近代化の捉え方、名付けるとするならば「開化観」は探ってみると非常に興味深い。イギリスでの留学や、英文学者、作家としての生活をする中で培われていったであろう「開化観」が著作の数々で表れていることを鑑みると、「現代日本の開化」は漱石の人生の一大テーマであったのではないだろうか。講演の終盤で、漱石は日本の開化に対して「どうすることもできない、実に困ったと嘆息するだけで極めて悲観的の結論であります。」と述べている。結局、

思索の末に開化への向き合い方を発見することはできなかったのだ。

度々、漱石の発言や文章の一部分だけが独り歩きをして、漱石は憂国の懷古主義者であるという解釈が蔓延する。こうした動向を、漱石の筆跡を辿りつつ分析しようという考えが、私がこの一行を選んだ所以である。

漱石の講演から百十余年経った今、我々は明治日本の開化をどう捉えるだろうか。先の大戦からどの様な教訓を得ただろうか。今の地球を楽観視できるであろうか。漱石の生きた時代も、我々の生きる時代も、患いの社会であると感じた令和の夏である。

佳作

外側から見ると

白百合学園高等学校 3年

羽田 はだ 里緒 りお

作品名『吾輩は猫である』
選んだ一行

吾輩は猫である。名前はまだない。

私は、「吾輩は猫である。名前はまだない。」を選択した。その理由は、この作品を読んでいくにつれ、「吾輩」と自身を重ねるようになったことにある。「吾輩」の、どこか他人事のように物事を俯瞰して見つめているところが私自身の癖と重なったのだ。

私は、友人たちと会話をしている際に自分を遠くに感じる癖を持っていた。自分はここにいないはずで、確かに意思もあるはずなのに、それとはまた別の自分が自分を覗いているかのような感覚になるのだ。友人たちと自分との会話を、まるで何かの映像を観ているかのように、その場と自分とが切り離されたものとしてその空間に存在しているのである。この

感覚が「吾輩」にも通じているのではないかと考えた。

「吾輩」は、猫という立場から人間社会を俯瞰して見ている描写が多く見受けられる。人間社会の内側にいる、人間ではないものとしての「吾輩」は、自分の存在を外から眺め、冷静に人間を見ている。猫として、自分とは切り離されたものとして人間社会を見る「吾輩」と、自分の内側と自分自身が切り離されたかのように感じる私の視点が、私の中で重なったのである。

また、「吾輩」は作中にて「吾輩は猫である。名前はまだない。」と述べている。これは、単なる自己紹介というだけでなく、「吾輩」のアイデンティティの不確かさが見受けられる。他者との関係を築くためには重要な要素となるであろう名前を持たない「吾輩」は、自分は何者なのか、自分にはどんな役割があるのか、といったものが明確ではない。現実の世界で自分は本当に今ここに存在しているのか、自分という最も近い存在が遠くにいるように見える、といった私自身の感覚から発される焦燥感や曖昧さが「吾輩」と繋がったのである。

以上のことから、自分自身と「吾輩」に繋がりを覚えた私は、「吾輩は猫である。名前はまだない。」の一行を選択した。名前のない猫として人間社会を生きる「吾輩」は、自分の内側と現実の間を交差する私に少しの勇気を与えてくれたよう

に思う。「吾輩」は、自分のアイデンティティに固執せず、むしろそれを超越した存在として独特な視点と鋭い洞察力を活かしている。不確かさや不明瞭さを持つ自分というのを認めた上で「吾輩は猫である。名前はまだない。」と発した「吾輩」に自分をなぞらえると共にどこか憧憬の念を抱いている。

佳作

私の決心

広島県立海田高等学校 2年

森川 もりかわ 勇 ゆう

作品名『ころ』
選んだ一行

私はしかたがないから、死んだ気で生きていこうと決心しました。

私には夢がありません。好きな未来の形は想像できるのに夢にはならないのです。言わば夢はあるが私はそれを追いかけないので夢へ成りきれないのです。

「私はしかたがないから、死んだ気で生きていこうと決心しました。」この一文は私のはつきりとしな部分と言語化したように感じました。これは夏目漱石の「ころ」という作品の一文です。この作品に登場する先生と呼ばれる人物は自殺した友人にとった自身の過去の行動を後悔します。やがて罪滅ぼしの念にとられながら自分で自分を殺すべきだと考えるようになります。しかし自殺する勇氣はなくなつたりつ

いた生き様が私の選んだ一文の内容です。

この一文を選んだ理由は私に通ずるものがあると感じたからです。それは死んだ気で生きるという点です。私は人生が進んでいくようにあまり感じません。月日や環境は変化し続けていますが私の内面はあまり変化がないのです。私のこのような部分は正に死んだ気で生きているようなものです。私は大きな感情の変化のない人間だと思っています。私の心は良く言えば冷静で悪く言えば停滞しているのです。だから私には未だにはつきりとした追いかける夢がないのです。目標はありますが熱意がなく夢と呼べるようにはなりません。元々私は感情を表に出すのが苦手な人間です。周りの変化に敏感で自分より周囲を気にしていることが多いと思います。

この作品の先生のようにしかたがないと自分を殺した生き方を私もしてきた節があります。私は今まであまり自己を優先した生き方ができていなかったのかもしれませんが。もしくは大きく行動する勇氣がなかっただけかもしれません。どちらにしても私はこの一文に自分の過去の無意識な生き方を感じました。この文は確かに僕の心を揺らしたのです。

死んだ気で生きるとはとても絶妙な意味を持ちます。言い表しにくい状況ですが間違はなく生き生きしていかないことは確かです。死に近い心持ちでありながら生きようとする意志があるとは何とも複雑です。この先生の場合、罪滅ぼしから

か妻を一人にしないことが生きる理由でした。つまり他者との中に自分が生きる理由を見い出していたのです。人間は自分の中と他者との間のどちらにも生きる理由を見い出せない時死ぬのです。これが私がこの一文から見い出した結論です。この作品から私は死へと向かう人間の心境を学びました。私はこれから生きていくために夢が必要です。それは感情から生まれるもので人間らしい心の持ち方が重要です。私は自分の意志で人間らしく生きていこうと決心しました。

読書感想文 選んだ一行

惜しくも入賞を逸しましたが、最終審査候補となった作品と、その「わたしの一行」を掲載します。

《中学生の部》

学習院女子中等科 2年

題名 魂のつながり

作品名 『坊っちゃん』

選んだ一行 「おれは空を見ながら清の事を考えている。(略)

清は皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たって耻ずかしい心持ちはしない。」

暁星中学校 3年

題名 恋とは

作品名 『いっころ』

選んだ一行 あなたの心はとつくの昔から既に恋で動いてい

るじゃありませんか

暁星中学校 2年

題名 人間はおろかである

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行 人間ほどふてえやつは世の中いねえ

長野清泉女学院中学校 1年

題名 悪人にならないところ

作品名 『いっころ』

選んだ一行 「悪い人間という一種の人間が世の中にあると

君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。」

《高校生部》

熊本県立熊本高等学校 1年

題名 漱石の旅、私の旅

作品名 『草枕』

選んだ一行 しばらく人情界を離れたる余は、少なくともこの旅中に人情界に帰る必要はない。あつてはせつかくの旅が無駄になる。人情世界から、じゃりじゃりする砂をふるって、底にあまる、うつくしい金のみを眺めて暮らさなければならぬ。

恵泉女学園高等学校 2年

題名 矛盾

作品名 『いころ』

選んだ一行 人間を愛しうる人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐にはいろうとするものを、手をひろげて抱き締めることのできない人、――これが先生であつた。

恵泉女学園高等学校 2年

題名 妻を想う

作品名 『いころ』

選んだ一行 「私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思ひました。」

東京都立桜修館中等教育学校 2年

題名 『いころ』より、一行

作品名 『いころ』

選んだ一行 私はその人を常に先生と呼んでいた。

長野清泉女学院高等学校 2年

題名 迷いは成長の象徴

作品名 『三四郎』

選んだ一行 「迷える子――わかつて？」
ストレイ・シープ